

令和7年度

「北方領土青少年等現地視察事業」報告書



令和7年 10月11日(土)～10月13日(月)

主催：北方領土返還要求運動神奈川県民会議

主管：神奈川県北方領土問題教育者会議

事業の概要

神奈川県民会議が構成した青少年等現地視察団を北方領土隣接地域に派遣し、青少年に北方領土を視察してもらうとともに、元島民の体験談を聞くなどの機会を提供することにより、北方領土問題を身近に捉えてもらい、本問題の一層の理解と関心を高めてもらうことを目的として実施しました。

参加者は、「神奈川県北方領土問題教育者会議」が募集した、令和7年度北方領土に関する作文コンクールで入賞した高校生6名及び中学生8名の青少年計14名、学校関係者、県民会議事務局、教育者会議、教育委員会関係者で構成した引率者計6名、神奈川県民に広く伝えるため、神奈川新聞社記者1名の、合計21名で視察しました。

なお、視察にあたって、事業の目的・内容を深く理解するよう事前学習会を開催しました。

選考会

日 時：令和7年9月6日（土）14：00～17：00

会 場：連合神奈川会議室 横浜市中区山下町 24-1 ワークピア横浜4F

参加者：教育者会議役員10名・県教育委員会1名・県民会議事務局1名 計12名

内 容：作文コンクール入賞者より派遣要請生徒決定

表彰式・事前研修会

日 時：令和7年9月20日（土）14：30～16：00

会 場：ワークピア横浜3F「いちょう」 横浜市中区山下町 24-1

参加者：生徒・保護者・引率者・教育者会議役員 計42名

内 容：

1. 開会
2. 教育者会議会長挨拶 平塚中等教育学校校長 松本 靖史
3. 作文コンクール表彰
4. 令和7年度 北方領土青少年等現地視察事業について
 - (1) 趣旨説明 (2) 事前学習（DVD 上映・前回の視察の様子） (3) 引率紹介
 - (4) 参加者紹介 (5) 日程説明（諸注意含む） (6) 持ち物
 - (7) 事後活動について
 - (8) 第39回北方領土返還要求運動神奈川県民大会への参加について
 - (9) 質疑応答
5. 閉会



事後報告（第39回北方領土返還要求運動神奈川県民大会）

日 時：令和7年10月31日（金）18：00～19：20

会 場：横浜情報文化センター6階 情文ホール（横浜市中区日本大通11）

参加者：北方領土返還要求運動神奈川県民会議役員及び会員

神奈川県北方領土問題教育者会議役員及び幹事

北方領土青少年等現地視察事業視察団

内 容：関東甲信越青少年交流会の実施報告（動画上映）

北方領土青少年等現地視察事業の実施報告

ライブ配信による特別講演（神戸学院大学経済学部 教授 岡部芳彦氏）

「ロシア・ウクライナ戦争と北方領土一戦後80年、今我々にできること」



参加者

【生徒】

氏名	学年	学校名
向新 千晴	中 1	座間市立南中学校
甲斐 正太郎	中 1	横浜市立富岡東中学校
五十木 萌恵	中 2	横浜市立中川中学校
梶田 理仁	中 2	川崎市立生田中学校
山口 瑚都	中 2	横浜市立金沢中学校
須藤 大琥	中 3	横浜市立中川中学校
藤井 彩音	中 3	横浜市立生麦中学校
中浜 唯紗	中 3	横浜市立浦島丘中学校
パラヒノ ノア リアーナ	高 1	神奈川県立二俣川高等学校
高山 洋昭	高 1	横浜市立横浜商業高等学校
岩崎 大暉	高 1	横浜市立横浜商業高等学校
丸子 綾	高 2	神奈川県立横浜栄高等学校
片岡 基	高 2	神奈川県立岸根高等学校
渡辺 莉光	高 3	神奈川県立新羽高等学校

【引率】

氏名	分担	所 属
松本 靖史	団長	神奈川県立平塚中等教育学校校長
前島 藍	副団長・総務	北方領土返還要求運動神奈川県民会議事務局長
澤野 理	元島民記録	神奈川県立横浜栄高等学校総括教諭
大坂 誠	写真・SNS	川崎市立生田中学校教諭
中里 晋一	学習会	川崎市教育委員会生涯学習部地域教育推進課指導主事
酒井 亮子	健康管理	神奈川県教育委員会教育局支援部子ども教育支援課指導主事
矢澤 拓郎	報道	神奈川新聞社

団長報告

「神奈川県中学生・高校生による現地視察研修会」

団長 神奈川県立平塚中等教育学校 校長 松本 靖史

令和7年10月11日（土）から13日（月）にかけて、令和7年度北方領土青少年等現地視察事業の一環として神奈川県北方領土問題教育者会議が主管する「神奈川県中学生・高校生による現地視察研修会」を実施することができました。

この研修事業は、青少年等現地視察団を北方領土隣接地域（根室市、別海町、中標津町、標津町及び羅臼町）に派遣し、青少年等に自らの目で北方領土を見てもらうとともに、元島民の体験談を聞くなどの機会を提供し、北方領土問題を身近に捉えてもらうことにより、返還要求運動の確実な継承を図ることを目的としています。コロナ禍等による中断をはさみ、昨年度7年ぶりに再開したこの研修会は、実施を辞退した県があったため2年連続で実施することができました。今回は前回実施の経験を生かして実施することができましたが、新たに羅臼での観光船のプログラムを取り入れたこと（最終的には波浪予想で中止となってしまいました。）、7月30日にカムチャッカ半島沖でマグニチュード8.8の巨大地震が発生し日本にも津波が到達したこと、現地でヒクマによる人身被害が発生していたことなど、いくつか気になる点があったことから、引率者にとっては全員無事に帰還させるまで緊張感のある旅でした。

羽田空港出発時はあいにくの雨模様でしたが、現地は3日間何とか天気が持ち、国後島、歯舞群島の貝殻島を遠望することができました。生徒たちだけでなく引率者も貴重な経験を行うことができました。

今回の現地視察研修会も昨年度に引き続き、北方領土を学ぶことにとどまらず、道東地域の地理、自然、産業、人々の生活を見聞し、探究することも大きな目的としました。1日目と2日目の夕食後には、1時間ほど学習会を設け、一人ずつ見聞したことを発表し、発表した内容を共有して学びを深めていきました。学習会では脚の長い給油タンク、バス停の待合室、風除室、キリル文字併記の標識、縦向きの信号機など中学生・高校生ならではの発見がたくさん報告されました。今年度は、初日に元島民の古林貞夫さんの話を聞く場面を設けたのですが、古林さんの話を踏まえての発言もたくさんありました。

北方領土問題に関しては、2022年（令和4年）2月のロシアによるウクライナ侵攻及びその後の国際情勢の変化・日ロ関係の悪化を受けて、先が見通せない状況が続いています。しかし、日ソ国交回復以降の歴史を見ても、全く解決の見通しが立たない時期がずっと続いたのではなく解決に向けたチャンスがいくつかあったように思います。したがって、この先の解決に向けて、この問題を若い世代に関心を持ってもらい継承していくことは、本当に意味があることだと思います。そのような意味で、今回の研修事業はその一助になったと確信しています。

行程

Ⅰ日目 10月11日(土) 天気 神奈川:雨／中標津町・根室市:晴/曇り

時 間	場 所	研修概要
11:30	羽田空港集合 	羽田空港にて出発式を行い、団長からの挨拶や研修における計画などを確認しました。
12:35	羽田空港発(ANA377便)	
14:15	根室中標津空港着	
16:00～ 17:00	北方四島交流センター(ニホロ) 元島民の話 	国後島泊村出身の古林貞夫さんより元島民の思いとして、当時の島での暮らし、敗戦後の様子、島に対する思いなどを聞くことができました。 
17:30	ホテル着	
18:00	夕食	
19:30～ 20:30	学習会 	1日目の視察中に気づいたことや考えたことを地理的・北方領土に関してなど、広い視点で交流しました。
22:00	就寝	

2日目 10月12日(日) 天気 神奈川:曇り/根室市:曇り

時 間	場 所	研修概要
7:00	朝食	
8:15	ホテル発	
8:25～ 8:45	金刀比羅神社 	高田屋嘉兵衛によって創建され、北方領土の多楽島・志発島・水晶島・色丹島・国後島にあった神社の御神体も預かっている神社を参拝しました。
9:15～ 11:15	納沙布岬 北方館 ・ 北方領土資料館 	北方館副館長清水さんの説明のもと、目の前に見える貝殻島の灯台を眺めました。館内では、ロシアとの関係なども含め、貴重なお話を聞くことができました。
11:45～ 12:30	昼食（ねむろお魚食堂）	根室で水揚げされた「ほっけ」をいただきました。
12:45～ 14:15	北方四島交流センター（二ホロ） 館内見学 	職員の方より丁寧な説明を受けながら、館内を見学しました。 
17:00	ホテル着	
18:00	夕食	
19:30～ 20:30	学習会 	1日目の学習会をもとに、さらに気づいたこと、北方領土について考えたことなどを共有しました。
22:00	就寝	

3日目 10月13日(月) 天気 神奈川:曇り/羅臼町・標津町:曇り

時 間	場 所	研修概要
7:00	朝食	
8:15	ホテル発	
8:30～ 10:30	羅臼国後展望塔・羅臼神社 (荒天のため羅臼ネイチャー クルーズ欠航) 	羅臼漁港を眼下に、国後島・ 野付半島を望みました。元島 民の方よりお話を伺うことも できました。 
11:15～ 12:30	標津サーモン科学館 	映像視聴や説明を受けながら、 サケについて学習しました。チ ョウザメ「指パク」体験コー ナーは大盛り上がりでした。 
12:40～ 13:20	昼食(標津サーモンプラザ)	大きなサーモンフライバーガー をいただきました。
13:50	根室中標津空港着	
14:50	根室中標津空港発(ANA378便)	
16:45	羽田空港着 	到着式を行い、研修のまとめを 行いました。
17:15	解散	多くの保護者に迎えにきていた だき、解散しました。

視察の様子を Instagram にてリアルタイム発信しました。



元島民 古林貞夫さんによる講話

神奈川県立横浜栄高等学校 澤野 理

今年は現地視察最初のプログラムとして元島民のお話をうかがった。根室中標津空港に到着後、ただちにバスに乗り換え、会場の根室市の北方四島交流センター（二ホロ）へ向かった。今年お話しいただいた古林貞夫さんは、国後島泊村瀬石で 1938（昭和 13）年に生まれ、小学校 3 年生の時まで島で生活されていたということであった。

最初は、瀬石での暮らしについてのお話。瀬石は、国後島中央部の古釜布という港町に近い集落で、自然が豊かで景観も良いところで、7 割近くの人が漁業に従事し昆布やホッキ貝を採って暮らしていたということだ。また、娯楽としては年に数回、活動写真が巡回して来たことを懐かしそうに語っていた。

次に、ソ連軍の侵攻についての話となった。終戦後の 1945 年 9 月 2 日ソ連船が突然来航、上陸してきたソ連兵は、家に入って来て武器や日本兵の有無を搜索したのだが、そのとき貴金属等の略奪もあったということだった。その後、駐留するソ連兵の宿舎を建てるための労働に動員され、古林さんのお父さんは製材作業に従事させられたということだ。宿舎ができた後は、お祖父さんが兵士の食堂で手伝いをする事になり、時々残り物をもらってきたようだ。また、日本軍の守備隊の備蓄米は、終戦後に島民へ分配されたということで、食料に不自由したとは思っていなかったようである。ソ連兵の印象については、子どもには親切で、一緒に遊んでもらった記憶もあり、古林さんも片言のロシア語を覚えたと言っていた。この点は、昨年お話をうかがった工藤繁志さんも似たような経験をされていたことを思い出した。工藤さんの時もそうであったが、ソ連軍侵攻後の日々は、実際は相当に怖ろしく、そして辛い日々であったのではないだろうか。

そんな島での生活は、1947 年 7 月に急に変化することになった。日本本土への強制送還が始まったのである。島に残るためにはソ連国籍にならなければならなかったからだ。古林さんは、10 月下旬、第 3 回の送還で島を離れた。最初に向かったのは樺太の真岡（ホルムスク）で、現地の女学校を転用した収容所で 1 ヶ月ほど待機させられ、その後千歳丸という貨客船に乗り 11 月 20 日に函館に上陸。古林さん一家は、十勝清水にいたお祖母さんの妹を頼って住み込んだそうだ。その後、芦別に移り炭鉱の仕事に就いた後、1950 年に根室に移って風蓮湖の漁業開発に携わるようになり、今でも現役で働いている。

お話の最後は、返還運動に関することだった。古林さんは、若い頃は返還運動に積極的に参加できなかったが、50 代より関わるようになったと語る。当初、島ごとに結成されていた返還運動の組織は、現在、統合されているが、返還は実現していない。国民世論を盛り上げる運動ができなかったのかと思うこともあるそうだ。しかし、北海道から離れた地に暮らしている人々の関心があまり高くないということも一方の事実で、この点は、我々の問題でもあるのではないだろうか。運動の成果の一つとしてあげられるのは、元島民の墓参・ビザなし交流で、元島民は自由訪問もできるようになった。とはいえ、いろいろと制限もあり、

古林さんの故郷である瀬石はロシアの警備隊本部があるため、入ることができないそうだ。古林さんは、2012年7月に初めて墓参に訪れ（瀬石には入れないので、近くの場所から拝んだとのこと）「船上から故郷の山並みを見たとき涙があふれた。」と語る様子に胸を打たれた。その後、2014年、17年に自由訪問を果たし、2人のお子さんも同行したということだ。しかし、2020年のコロナ禍で訪問は中止となり、22年からはウクライナ戦争の影響で行かれなくなり、今日に至っている。「せめて墓参だけでも復活できないか、そんな気持ちでいっぱいだ。」という言葉でお話を締めくくった。

【生徒たちとの質疑応答】

Q1 島ではどのような遊びをしていたのか？

A1 戦争ごっこや侍ごっこ、それからかくれんぼなどをしていた。

Q2 ソ連兵の印象はどうだったか？

A2 子どもに対しては良くしてくれた。でも、憲兵みたいな人（青憲と呼んでいたそうだ）は厳しかった。

Q3 ロシアについてどう思っているか？

A3 なぜ中立条約を破って不法占拠をしたのか、千島に対しては、8月17日の占守島上陸から攻撃が始まっている。これは、8月15日の終戦後のことだ。許しがたいことではあるが、交流が再開されれば隣国土の国として仲良く付き合いたい。

追記 視察団に参加した生徒のひとり（今年度の作文コンクールの入賞者）は、古林さんが根室の市民大会で語った言葉をテレビニュースで耳にしたことによって、問題意識が深まったと作文に記した。今回、偶然とはいえ、古林さんのお話を直接聞くことができたことを大変に感激していた。



令和7年度「北方領土青少年等現地視察支援事業」アンケート結果

【生徒】

1 性別

男 性	女 性	その他	計
6人	8人	0人	14人
42.9%	57.1%	0%	100.0%

2 学 年

小学生	中学生	高校生	その他	計
0人	8人	6人	0人	14人
0%	57.1%	42.9%	0%	100.0%

3 あなたは、今回の現地視察事業の参加が決まる前は「北方領土問題」について知っていましたか。

項 目	該当者	割 合
問題について聞いたことがあり、内容も知っていた	4人	28.6%
問題について聞いたことがあり、内容もある程度知っていた	7人	50.0%
問題について聞いたことはあったが、内容までは知らなかった	3人	21.4%
問題について聞いたことはなかった	0人	0%
計	14人	100.0%

4 今回、あなたが特に関心を持ったプログラムは何でしたか。二つまで選んでください。

項 目	該当者	割 合
北方領土の視察（目で見える北方領土）	9人	37.5%
元島民の体験談	13人	54.2%
啓発施設の見学	2人	8.3%
体験学習（具体的に）※	0人	0%
その他 ※	0人	0%
計	24人	100.0%

- 5 あなたは現地視察事業に参加して、参加する前よりも「北方領土問題」に対して関心が深まりましたか。

項 目	該当者	割 合
大変深まった	14人	100.0%
少し深まった	0人	0%
深まっていない	0人	0%
計	14人	100.0%

- 6 今後、「北方領土返還」のためにあなたは何か役に立ちたいと思いますか。

項 目	該当者	割 合
役に立ちたいと思っている	14人	100.0%
あまり思わない	0人	0%
計	14人	100.0%

- 7 「役に立ちたいと思っている」と答えた者

あなたは、どのようなことができると思いますか。考えられることを何でも、自由に記入してください。

- ・ 神奈川の人の多くは、問題を意識したこともなかったり、概要を知らなかったりするのではないかと思いますので、まずは学校、次は町内会などでイベントを開き、楽しんでもらったあとに少しお話をさせてもらうような機会を作りたいです。
- ・ 今回の北海道の資料館では、それぞれ署名活動が行われていて、こちらでも集めることができたらうれしいと思いました。学校にも設置してみたいです。
- ・ 身近な人に今回の視察でどのようなことをしたのかを話しながら、北方領土のことを知ってもらう。少しでも多くの人に北方領土問題について知ってもらいたい。
- ・ 今回の視察で学んだことを神奈川で友人等に広めて少しでも北方領土問題を理解してもらい、関心をもってもらう。
- ・ 北方領土問題を解決するためには、若い人達の協力が必要だと思います。そのためにまず知ってもらうのが大切だと思うので、かえってクラスの人などに伝えたい。
- ・ 北方領土や海沿いにインフラを整備し、日本、ロシア、ヨーロッパへの交通手段を広げていき、この問題を交流の架け橋へと変えていきたい。

- ・ この神奈川県の見察団としてやってきたから、教科書やネットで調べて分かることではなく、実際に目で見て感じたことや肌で感じたことを自分の言葉にできるようにしたい。例えば周りの子に北海道に行って分かった出来事や今の日本の状態、ロシアと日本のお話をしたり、自分達が積極的に返還運動に参加することもすごく大切なことなんだと身にしみて感じる事ができた。
- ・ 誰かに伝えていくことができると思う。
- ・ 身近な人から、北方領土について話を広めていって、領土問題について関係のないこと、どうしようも出来ないことと決めつけずに自分にもどうにかできるのではないかと一度考えていこうということを伝えていきたい。
- ・ 実際に北方領土の周辺地域に行き、元島民の方や解説員の方たちのお話を聞いて、自分たちだからこそ、身の回りの人や家族に北方領土の現状をよりはっきり伝えられると思う。また、できるかどうかはまだわからないが、先生方がおっしゃっていたように、自分たちで北方領土に関わるイベントを行ったり署名活動や北方領土の返還についての看板を設置したりして、北方領土というワードが日本人全員に浸透していけたらいいなと思います。
- ・ 私は、作文に「北方領土について正しい知識を身につけ、多くの人に伝え広めていきたい。」と書き、今回の視察で元島民の人が今どういう気持ちで何を考えているのか、そしてロシアの人たちに対してどのような感じていたのかなど、社会科の授業では習わなかったことを知れた。なので、ふだんこのような視察でしか知れなかったことや感じられなかったことなどをできるかぎり1人でも多くの人に広めていきたい。この経験を生かして次の世代にも本当に正しい知識を話してどれほど深刻でも辛くて苦しい問題で今すぐにでも私たち若い世代が解決しなければならないということを伝えていくことができると思う。貴重な体験をありがとうございました。
- ・ 周囲の人への北方領土問題の啓発
- ・ 自分ももっと問題について調べる
- ・ 神奈川の人たち（小中高生とか）に問題を知ってもらうイベントを開いてみたい。
- ・ 友達や家族に今回の視察のことを話す。
- ・ 北海道と違って神奈川は、地域ぐるみの返還運動がないから、まずは友達に今回のことを話したり、意見交流をしたりして自分の住む地域の北方領土問題へのりかいを広めていきたいと考えました。
- ・ 今回の学習を通して学んだことを伝えたり署名活動へ協力したりすること。
- ・ まわりの人に発端領土問題の現状について話し、広めていくこと。
- ・ 北方領土問題は身近なものであることを話し、まわりの人だけでも領土問題への意識を高める。

【引率】

1 性別

男 性	女 性	その他	計
5人	2人	0人	7人
71.4%	28.6%	0%	100.0%

2 今回、あなたが特に関心を持ったプログラムは何でしたか。二つまで選んでください。

項 目	該当者	割 合
北方領土の視察（目で見る北方領土）	6人	50.0%
元島民の体験談	5人	41.7%
発施設の見学	1人	8.3%
体験学習（具体的に）	0人	0%
その他	0人	0%
計	12人	100.0%

3 今回のプログラムに対する感想、新たに取り入れた方が良いと思うプログラムなど、引率していただいた上での感想を自由に記入してください。

- ・ クルーズ船を活用した洋上研修
- ・ 多くの人の話を聞くことができ、人によって見方がちがうことが分かりよかったです。友好的な方もいれば、そうではない見方の方もいて。「生」の声が良かったです。それらについて自分なりに考えられたのではないかと思います。
- ・ 少し移動は長かったですが、うまく休む時間になったと思います。
- ・ 各施設での丁寧な説明は、とても勉強になりました。ただ見るだけではなく、想い聞きながら見学することができて良かったです。
- ・ 学校等での学習→作文→現地視察というサイクルは生徒の成長がよくわかるので、今後も続けたいと思います。現地の中高生との交流があっても良いかもしれません。
- ・ 元島民の話が1人だけだと、その人のみの印象から当時の様子を伺えないため、もう一人別に元島民の声を聴くプログラムがあればと思った。

- 4 現在「北方領土返還要求運動」として、様々な取組が行われていることをご存知でしたか。

項 目	該当者	割 合
取組について聞いたことがあり、内容も知っていた	5人	71.4%
取組について聞いたことがあり、内容もある程度知っていた	0人	0%
取組について聞いたことはあるが、内容までは知らなかった	2人	28.6%
取組について聞いたことはなかった	0人	0%
計	0人	100.0%

- 5 あなたは「北方領土返還要求運動」に参加したいと思いますか。

項 目	該当者	割 合
積極的に参加したい	3人	42.9%
機会があれば参加したい	4人	57.1%
参加したくない	0人	0%
計	7人	100.0%

- 6 小学校高学年～高校生に対して、「北方領土返還要求運動」への参加を促すためには、どのような取組が効果的だと思いますか。二つまで選んでください。

項 目	該当者	割合
テレビ番組や新聞報道などでの報道	1人	7.15%
学校教育の取組	5人	35.7%
若い世代向けの啓発イベントの実施	3人	21.4%
ホームページやインターネットなどを用いた啓発	1人	7.15%
SNS を用いた啓発	4人	28.6%
計	14人	100.0%

参加生徒の感想

「解決の糸口を作るために」

座間市立南中学校 1年 向新 千晴

「ロシアは憎い、嫌いだ」。きっと、北方領土の元島民の人達はそう思っているのだろう。学校の教科書や資料を読んで、私が初めにした想像です。ですが、実際に元島民の古林さんにお話を伺ったり、元島民の方の体験をもとにした映画を見たりして、それが大きな間違いだとわかりました。「ロシア兵の人は優しくて、お菓子をもらったりして、仲良くしていた。」
「ロシア兵の家族と遊んだり、ロシア軍が上陸してきてからも、島での生活は楽しかった。」
このようなことを聞いて、「人と人とは仲良くできても、国と国とだとそうはいかない」そんな現実に関心、少し寂しく思いました。

私はバレエを習っていて、ロシアの民族舞踊を踊ることができます。今まではただ楽しく踊っていただけでしたが、実際に元島民の方のお話を伺ったり、直接国後島や歯舞群島を眺めたりしたことで、今は北方領土のこと、ロシアの人々との交流のことを考えながら踊ることができています。私はロシア語がわからないけれど、踊っている時は国の境を超えて、同じように踊る人と繋がってられる気がしました。芸術、スポーツ、食べ物…。言葉が通じなくても、文化には人と人をつなぐ力があるのだと感じました。



今の私には、国と国をつなぐためにできることはほとんどありません。しかし、今回の経験を通して、私は人と人、国と国をつなぐ仕事につきたいと考え始めました。文化交流のサポートをする仕事をしたいからです。お互いの文化に興味を持ったり、北方領土問題のリアルを知ろうとしたりすることが、国と国をつなぐことへの第一歩だと思います。



「いつか、北方領土に自由に行くことができるようになったら、みんなで行こうね。」根室や羅臼での視察中に視察団のメンバーと話したことです。私は将来、文化の力で人と人をつなぎ、少しでも早くそんな日を作れるような人になりたいです。そのための第一歩として、ロシア語のキリル文字を調べてみました。

「北方領土隣接地域での視察を通して」

横浜市立富岡東中学校 1年 甲斐 正太郎

北方領土隣接地域を訪れるため中標津空港に降り立ったときにまず目に入ったのは、北方領土問題のラッピングが施されたバスでした。そしてバスで移動していると「返せ！北方領土」と書かれた看板があちこちに立っていました。さらに、視察で訪れた多くの場所には北方領土返還を求める署名コーナーがありました。僕の住む神奈川では県庁でのパネル展以外でそのようなものを見たことがなかったので、とても印象に残りました。現地では北方領土問題が身近で切実なものとして受け止められており、地域全体がこの問題の解決を強く願っているということを実感しました。



視察の中で特に心に残ったのは、元島民の古林貞夫さんのお話です。古林さんは1937年に国後島の瀬石で生まれました。1945年、ソ連軍の艦船が古釜布沖に現れ、家々を回って日本兵をかくまっていないか、銃を持っていないかを調べたそうです。「とても怖かった」と古林さんは語っていました。その後、ソ連兵とその家族が国後島に住み始め、古林さんは木材の製材所で働かされましたが、子どもには優しく接してくれたそうです。

1947年7月には島民の強制送還が始まり、古林さんも10月に貨物船でどこに行くのかも分からないまま、クレーンで積まれて樺太の真岡収容所に送られました。そこでは黒パンだけの食事と自給自足の生活で、大人たちは極寒の中で丸太を切り出す作業を続けたそうです。日本の船が迎えに来てくれることが、ただ一つの希望だったといいます。

その後、函館へ行く船に乗り、新しい土地での生活が始まりました。古林さんは炭鉱で働き、1950年に根室へ転居しました。1964年には墓参が許可され、1991年からはビザなし交流が始まりました。しかし、2017年に墓参をした際、生まれ故郷の瀬石はロシア警備隊の本部となり、墓石の前に立って墓参をすることができなくなりました。さらに、新型コロナウイルスやウクライナ侵攻の影響で、今は墓参もできなくなりました。古林さんは「せめて墓参をしたい」と語っていました。

元島民の平均年齢は89歳。人数も終戦直後の3割を下回っています。このままでは、島に帰れないまま亡くなってしまう人が増えてしまいます。

今回の視察を通して、問題を他人事のように放っておくと、解決はどんどん遠ざかってしまうと感じました。だから、僕はこのことを家族や友達にも伝え、自分にできることを少しずつ行動に移していきたいと思います。

「北方領土青少年等現地視察事業に参加して」

横浜市立中川中学校 2年 五十木 萌恵

今回参加した北方領土現地視察は、私にとって心に刻まれる貴重な体験になりました。初めての北海道はどこへ行っても景色が美しく、関東では感じることのできない自然の雄大さに感動し、納沙布岬では四島のかけ橋のゆらめく炎を見て返還への強い思いを感じました。

北方領土隣接地域では、北方領土について学ぶことができる沢山の啓発施設や看板、モニュメントがあり、他県との関心の差があることがわかって、この地域では不法占拠から80年もの長い間、返還を願い続ける多くの人が活動しているのだと思いました。また、双眼鏡で歯舞群島を見たときには、近くて遠い、行きたいのに行けないもどかしさや、当時の島の穏やかな暮らしを想像すると虚しさも感じました。北方館で副館長さんのお話を伺った時には、北方領土の問題が単なる土地の返還の問題だけでなく、豊富な水産資源や動植物、自然環境も失っていることに気づきました。

私が特に心に残ったのは、語り部の活動をされている元島民の古林さんのお話です。古林さんは、小学三年生のころまで国後島の泊村、瀬石で暮らしていました。当時の島での暮らしの様子、ソ連軍が上陸してきたこと、樺太の収容所から引き揚げしてきたことなどの貴重な経験を語ってくださいました。その後、何度かビザなし交流が行われましたが、新型コロナウイルスやウクライナ侵攻の影響で島に渡ることができなくなったことも教えてくださいました。最後に「少しでもはやく自分の生まれた島に渡って、せめて墓参だけでもできたら」と聞いたときには、どうにかしてその願いがかなえられないものか、日本とロシアの協議が一刻も早く再開されてほしいと心から思いました。

残念なことに日本とロシアの関係は悪化し、北方領土問題の解決に向けた対話は進展していません。しかし、このような状況でも諦めず行動することこそが大切です。私たちにもできることはあると思います。それは「知ること、伝えること」です。私は、夏休みに作文を書いたことをきっかけにこの問題に関心を持つことができました。今まで知らなかった歴史的背景や現状を学び、今回の現地視察では自分の目で見て、聞いて、感じたことで、当事者意識を持つことができたと思います。元島民の方の高齢化が進んでいます。一日も早い解決のために私たち次の世代が北方領土について正しい知識や関心を持ち、この問題を伝え続けることが大切ではないでしょうか。



「1000km 以上離れたこの地で」

川崎市立生田中学校 2年 梶田 理仁

今回、私が視察団の一員として北方領土の隣接地域に行き、北海道での返還運動を見て気がついたことがある。それは、北海道では他の地域と違い、地域で一つになって返還運動を行っているということである。そして、私はこの視察を通して、北方領土返還のために大切なことはより沢山の人がこの問題を知ってもらうことだと考えている。

北海道では「返せ！」といった強い口調で北方領土の返還を呼びかける看板を至るところで見ることができる。私は、強い口調であるものはもちろん、北方領土の変換を求める看板すら見たことがなかったためはじめは違和感を覚えた。しかし、最終日には違和感を感じなくなっていた。もし、自分たちの住む地域にもこのような看板がたくさんあるのであれば、その地域に住む人で北方領土問題に関して全く知らない人はほとんどいなくなるだろう。私はこの視察をきっかけに知人と北方領土問題について話す機会が増えたのだが、その際にそもそも問題について知らないという人も少なくなく驚いた。

日本は今、戦勝国であるロシアに対してかなり低い姿勢から返還を要求している。しかし、ロシアによる四島占拠は条約を無視した不法なもので、「返せ！」といった一見強い口調の返還要求も元島民の方の気持ちとしてみれば当然だ。私の住む地域がもし他国に占拠されてしまったならば、私も「返せ！」といった強い口調で返還を要求するだろう。今後何十年も自分の生まれ育った地に入ることができないのかと考えると、とてつもない怒りと悲しみが湧いてくる。しかし、そんな元島民の強い思いも北海道や北方領土から 1000km 以上離れた神奈川では知ることが難しくなっている。この視察に行くきっかけになった作文を書く前の私もそうだった。問題について全く知らないというわけではなかったが、私に持っていたものは教科書にある知識だけだった。そのため、私は北方領土問題に対して特別に興味を持つこともなかった。しかし、私は北方領土の返還を実現させるためには、北海道以外の地域でもこの問題に対して知識と意思を持つ人が増えていく必要があると考えており、そのためには、まず北方領土問題を知って、考えてもらう機会を用意する必要があると考えている。今、私達の住む地域では北方領土の返還のためにできることを全てやっているとは言えない。私は今回の経験を活かして、まずは北方領土問題についていろんな人と話してみようと思う。

「北方領土問題を知ることから『共存の島』へ」

横浜市立金沢中学校 2年 山口 瑚都

私は、今回の北方領土視察で現地を視察するという体験を通し、本やインターネットなどの間接的な情報以上のことを知り、多くの学びを得ることができました。

視察で特に心に残ったことは自分が立っている場所と北方領土の近さ、もう一つは元島民の古林さんのお話です。納沙布岬から見える灯台。展望台から見える国後島。少し空が曇っていてもいずれも肉眼でははっきりと見る事ができました。納沙布岬から貝殻島までのたった3.7kmの距離でさえ自由に行くことができない。目の前の島に向かうだけで銃を向けられてしまう。たとえそれが自分のふるさとだとしても…。海を挟んだところにそのような島々があることが信じられず不思議な気持ちになり、その辛さ、悲しさを肌で実感できました。

次に、国後島の元島民の古林さんのお話を聞いて新たに知ったことがあります。終戦時、ロシアの兵隊たちが次々と自分の家に入ってきてあらゆる所を捜査されました。そうしてロシアの人たちとの生活が始まったそうですが、その中でロシアの人たちは自分たち子供に優しく接し、時間があるときには遊んでくれたり甘いものをくれたりしたそうです。古林さんはこれらのことを懐かしそうに当時に思いを馳せながらお話しされました。私は今まで、元島民の方たちはロシアに自分の住んでいたところを全て奪われ敵対心を持たれているのではとばかり思っていました。今回の視察や古林さんのお話から北方領土でのロシア人との思い出は悪いものだけではないのだと初めて知ることができました。そして、最後に今はロシアに対してどのような感情を抱いているかという質問に対し、古林さんは「許しがたいが、交流が再開されてロシアの国と仲良くしたい。」「日本が言いなりになるのではなくお互いに信頼関係を持ちたい。」とおっしゃっていました。この話から、一刻も早く交流が再開され共に生活できる未来にしていきたいと心から思いました。

根室市では「返せ！北方領土！」「知る事が四島返還の第一歩」などとかかれた看板がいくつも見られました。これらは、私たちが住む神奈川県



では一つも目にすることがないのです。これは北方領土問題の認識が低いということを意味しています。私は「北方領土問題について知らない」ということが、島々が返還されない大きな理由の一つであると考えます。四島が不法占拠されてから80年、当時の実際の出来事や想いを語れる人もそう多くはありません。だからこそこれから私たちが古林さんをはじめとする北方領土に込められたたくさんの人の想いを風化させないために、そして共存できる島々にしていくためにさらに多くの人たちに北方領土問題について伝え広めていきたいと思っています。



「“遠い問題”ではなく“身近な思い”として」

横浜市立中川中学校 3年 須藤 大琥

先日、ロシアが色丹島と歯舞群島にある二つの無人島に独断で名前をつけたというニュースを耳にした。その知らせに、私は強い違和感と憤りを感じた。以前の私なら「遠い国の出来事」として聞き流していたかもしれない。しかし、北方領土視察団として現地を訪れ学んだ今、その出来事をまるで自分のことのように受け止めている。あの海の向こうには、確かに“日本の暮らし”があったことを実感したからだ。

その実感をより強くしたのは、北方四島交流センターで伺った元島民の古林さんの話だった。貴重なお話の中で印象に残ったのは、戦争や占領という厳しい状況の中でも、日本人とロシア人が子どもを遊ばせたり、教育を行ったりするなど、互いに関わりを持ち交流していたということだ。敵同士であっても、人としての優しさや思いやりが存在していたことを知り、私は深い感動と希望を感じた。領土をめぐる争いの中には、国境を越えた人と人との心のつながりがあったのだと思う。

その後、羅臼にある展望台から実際に国後島を見ることができた。望遠鏡を覗くと、国後島は想像していたよりもずっと近くに感じられた。ほんの少し海を渡れば届きそうな距離なのに、今は自由に行くことができない。古林さんをはじめ、生まれ故郷を追われた人々の苦しみや無念さがより身近に感じられた。北方領土問題は、遠い過去の出来事ではなく、今も私たちのすぐそばにある現実なのだ。

今回の視察を通して、私は北方領土問題は単なる領土争いではなく、そこに生きた人々の歴史や暮らし、そして心のつながりが深く関わる問題だと感じた。目の前に見えた国後島には、かつて多くの日本人が暮らし、日常を過ごしていた。その思いはニュースや数字だけでは決して伝わらないと思う。

今後、私たちにできることは限られているのかもしれない。しかし、歴史を正しく学び、元島民の方々の声に耳を傾け、次の世代へと伝えていくことには大きな意義があると思う。

古林さんによると、2022年のロシアによるウクライナ侵攻以降、北方四島への訪問が難しくなっているという。多くの元島民の方々が、自由に行き来できる日が再び訪れること、双方の関係が改善することを願っている。その思いを知り、北方領土問題は国と国の主張だけでなく、人と人との交流の力を信じて、平和を尊重しながら日本固有の領土としての主張を続けていくことが大切だと感じた。私にできる小さな行動として、歴史を学び深め、理解を広げること。それこそが、未来の平和と希望につながる一歩になるのだと思う。

今回の体験を通して得た“身近な思い”を、これからも忘れずに伝えていきたい。

「北方領土視察に行って」

横浜市立生麦中学校 3年 藤井 彩音

私は神奈川県の方領土青少年等現地視察団のメンバーとして、今回、方領土のすぐ近くまで行ってきました。話には聞いていましたが、納沙布岬から見えた水晶島は、本当にすぐ近くであって、ベイブリッジがあれば渡れそうなくらい近くてびっくりしました。道東に行くのは初めてだったのですが、思ったより寒くもなく、空気がきれいで、広くてのんびりしていて、とてもいいところでした。方領土も似たような良い環境なのだろうと想像できました。今回の視察で一番感じたのは、「思っていたのと実際はちがう」ということです。私たちは毎日いろいろな情報を見たり聞いたりしているけど、知らないうちに偏った見方になっていることがあることに気づきました。



国後島出身の古林さんのお話を聞きました。浜辺で温泉の蒸気でお芋をふかしたお話とか、家畜のエサ作りを手伝ったお話、活動写真の撮影隊が来てみんなで映画を見たなど、子どもころに国後島での生き生きとした生活があったことが伝わってきました。

中でも印象に残ったのは、古林さんがソ連の兵隊さんと楽しく遊んだという話です。それを聞いて、「ロシア人って怖そう」と思っていた自分のイメージがガラッと変わりました。ロシアという国と、ロシア人の一人ひとり個人を一色単に考えてはいけないと気づきました。やはり、実際に体験した人の話を聞くのは、本で読んだり人から聞いたりするのとは全然ちがうと思いました。古林さんは1938年生まれで、私の祖父と同じくらいの年代です。私の祖父は北海道の様似町の出身だったけど、元気なうちにもっと話を聞いておけばよかったなど、ちょっと後悔しました。

物事をちゃんと理解するには、いろいろな立場の人の話を聞くことが大事だと思います。ロシアが悪い、日本が悪いといって国同士で責め合っても、なかなか解決には向かわないと思うし、そこには一人ひとりの人がいて、それぞれ考え方や生活があることを忘れてはいけないなと思いました。



今回、学校の先生にすすめられて方領土の作文を書き、それがきっかけで視察団に参加できました。行く前は「自分にはあまり関係ない」と思っていたけれど、今はそう思うことはできません。実際に方領土を見て、島で暮らしていた人の話を聞いたからです。私には、この気持ちを伝える責任があるのです。先入観にとらわれないこと、そして国際問題や社会問題の中心には「人」がいることを忘れずに、今回の体験をたくさんの人に伝えていきます。方領土との交流が再開されたら、必ず参加します。現地に行き、ロシアの人たちと話し、仲良くなれたらうれしいです。そして、少しずつでもお互いにいい方向を見つけていけたらと思います。

「島に誓い、海を越えて届ける思い」

横浜市立浦島丘中学校 3年 中浜 唯紗

北方領土について学ぶ前の私は、遠く離れた島々をどこか他人事のように感じていました。ニュースや教科書で得た知識は、心でなく、頭で理解していたのだと思います。けれど、実際に北海道の根室を訪れ、海の向こうに島々を目にした瞬間、その「遠さ」は静かに変わりました。

目の前に広がる海の先に、帰ることのできないふるさとを思い続けている人がいる、そう考えると胸が締め付けられるようで、言葉にできない静かな想いが心の奥に広がっていききました。

視察中、道の駅で味わったソフトクリームの素朴な甘さに、土地の恵みと人々の温もりを感じました。ほんの小さな体験でしたが、そこにはこの地で生きる人々の優しさと、自然の力が静かに息づいていました。

そして、「ジョバンニの島」という物語に出会ったとき、私の心は深く揺れました。小さな子供たちが夢を抱きながらも、次代の流れに翻弄されていく姿。その一つ一つの描写に、島々に刻まれた“失われた日常”の重みを感じました。

標津サーモン博物館で学んだサケの生態も印象的でした。海と川を往復しながら命をつなぐ姿は、島々で生きる人々の強さと重なり、自然と人との絆を感じさせてくれました。

北方領土と聞くと、私はこの視察で感じた光景や想いを思い出します。80年以上経ってもなお、北方領土の返還が実現していないという現実。その事実を知った時、私はただ悲しむのではなく、「今の自分には何ができるのか」を考えようと思いました。それは、学びを心に刻み、語り継ぐこと。そして、あの海の向こうにいる人々の願いを想いながら、自分の言葉でその想いを伝えていくことです。

あの海を見つめたとき、風の音がまるで島々から届く声のように感じました。同じ空の下で、同じ未来を願う人たちがいる。その想いを受け取ったとき私は、今度は誰かにそれ届けたいと思いました。平和を願う心のバトンを、次の世代へと渡していけるように。

今回この貴重な機会をくださったすべての方々へ、心から感謝を伝えたいです。現地で案内してくださった方々、支えてくれた先生方、一緒に学びを深めた仲間たち。皆さんのおかげで、私は“自然と人のつながりの大切さ”や“想いを受け継ぐ意味”などを知ることができました。

そして私は誓います。あの海の向こうで生きる人の想いを胸に、自分の声で伝え続けることを。それが、島に誓い、海を越えて届ける想いです。

「境界線を超えて繋がる心」

神奈川県立二俣川高等学校 1年 パラヒノ ノア リアーナ

この度、北方領土青少年等現地視察派遣事業に携わり、私は国際的な歴史や領土問題が、教科書の上の遠い事象ではなく、私たちの身近な現実として存在していることを実感しました。北海道の東端、根室市に立ち、納沙布岬から水平線の彼方に浮かぶ国後島を目にした瞬間、その距離の近さと手の届かなさに、歴史や国際関係の複雑さを痛感しました。北方領土は単なる地図上の記号ではなく、生活や記憶が重なり合う人々の“故郷”であり、そこに暮らす人々の思いこそ、現実の重みを私に突きつけました。

太平洋に臨む納沙布岬から北方領土を眺め、望遠鏡で国後島を確認したとき、国後島の海岸そばに建っている建物を目の当たりにし非現実感と、目の前にあるのに誰しものが足を運び入れることのできない現状に、歴史と現実の隔たりを強く実感しました。北方領土資料館では、手書きの掲示板に訪れた人々の北方領土問題に対する思いが鮮明に綴られており、展示物を通して島々に暮らした人々の生活や文化を生々しく感じる事ができました。

また、北方領土問題啓発施設「北方館」副館長の清水幸一さんによる北方領土の歴史に関する講話も受け、政治的背景だけでなく人々の暮らしや思いに触れることができました。特に私の心に残っているのは、北方領土で暮らすロシア人が日本で買い物をして、日本の技術や商品で日常を支えている一方で、国境の壁によって人々の交流が制限されている現実です。文化や生活が密接に結びついているにもかかわらず、政治的・歴史的な対立によって隔られていることを目の当たりにし、争いの壁を越えて交流を生み出すことの重要性を強く感じました。人間同士の理解こそ、国境を超える力の源泉であることを身をもって実感しました。

北方領土問題は、外交交渉や政府間協議だけで解決されるものではありません。私たち一人ひとりの行動や声も、未来を形作る力を持っています。派遣事業の間では、視察団同士が対話を重ね、互いに北方領土への理解を深める姿があり、今後の未来を形作る一助となることを感じました。その光景に、私は人間が持つ“境界を越える力”を見出し、学問や外交だけでは得られない実感を伴った洞察を得ました。戦後80年近くを経た今も、帰還を待ち続ける人々の思いは絶えることなく存在しています。その思いを受け継ぐことは、過去を記憶するだけでなく、未来を築くことにもつながると感じました。私は学んだことを単なる記憶として終わらせず、学校や地域での発表、SNSを通して周囲に伝えていきたいと思います。さらに、領土問題を歴史や文化の背景から多角的に考察し、理性的かつ感情に基づく理解の両面を重視した議論に貢献していきたいです。2泊3日の現地視察を通して、私は北方領土問題を地図上の線や政府の施策としてではなく、生活や心の現実として理解することができました。人々の暮らし、想い、国際的な観点に触れることで、知識だけでは得られない深い洞察を得ることができたと思います。本派遣事業は、若者として歴史・外交・人間理解を統合的に学ぶ貴重な機会であり、この体験を基盤に、私は行動し続ける一人でありたいと改めて確信しました。

「北方領土問題解決のためにできること」

横浜市立横浜商業高等学校 1年 高山 洋昭

私は、北方領土近郊地域に行き、多くのことを学びました。視察の1日目に、元島民の方のお話を聞くことができました。元島民の方が、まだ小さいときのある日、海岸にソ連の軍艦が止まっていて、数人乗りのボートを出して上陸してきたそうです。そして、突然いろいろな人の家に入って金品をとっていったそうです。この話で特に印象に残ったのは、ソ連の兵隊が、当時子供だった元島民の方にやさしかったということです。北方領土を占領しているソ連の兵隊は、みんな乱暴でひどい扱いを受けていたものだと思っていたので意外でした。そのソ連兵は、子供たちとかくれんぼや鬼ごっこをして遊んであげたり、ときどきお菓子をくれたりと、優しく接してくれたそうです。そして、北方領土がロシアに占拠されてからも、お墓参りの時だけは北方領土に帰ることができたそうです。その話を聞いて、ソ連の兵隊も、国の軍人ではなく、一人の人間だということを改めて実感しました。そして、ソ連の兵隊も、軍人ではなく一人の人間なので、平和的解決の道もあるのではないかと感じました。

視察2日目に、北方館に行って、北方領土の現在の自然環境や、ロシア人の生活の様子についてのお話を聞き、学びました。北方領土の自然はとても豊かで、たくさんの魚や、美しい自然があるそうです。しかし、熊も多く、本土の北海道に生息するヒグマのおよそ3倍の大きさにもなる巨大なクマが生息しています。とても巨大なクマなのですごく危険ではありますが、自然が豊富なので本土のクマと違って餌が足りていて人を襲う可能性は少し低いそうです。この話を聞いて、北方領土がもし還ってきたらどのように土地を改良して帰ってきた人たちが住みやすい街にしていくかを考えました。元島民の人たちの中には嫌がる人もいるかもしれませんが、ロシアの人たちと北方領土に共存し、土地の改良などを手伝ってもらうのがいいと思います。また、北方領土に住むロシア人の人たちは、たまに日本に来て、日用品を爆買いしていくそうです。ロシア人には物を大切にすることがあまりない人が多く、島で何かを使い終わった後はそのままポイ捨てしてしまっているそうです。物を大切にしないためよく物が壊れて困るので、日用品を買いに来た日に、港から使えるようなものを持って行ってしまうのでよくものがなくなるそうです。この話を聞いて、もしロシア人と共存する時が来たらごみを分別して捨てることや、モノを大切に扱うことを教えていく必要があるのではないかと思います。

今回、北方領土青少年等現地視察事業を経験して感じたことは、北方領土は意外と近くにあるんだなということでした。前まではお墓参りは行けていたのに、コロナ禍で行けなくなり、今度はウクライナ戦争で行けなくなってしまいました。あんなに近くにあるのに行けないのはとてもつらいだろうなと思いました。ロシアがしていることは到底許されることではありません。ロシアは今すぐに北方領土を変換し、元島民の方々の生活を戻すべきです。しかし、これは国家間の問題ではなく、人と人との問題であると私は考えています。なので、共生・共存など平和的解決が必要です。平和的解決によって北方領土を取り戻すためには、私たち若い世代が元島民の方々の思いを受け継ぎ、まずは周りの人に北方領土の現状を伝えるなど小さなことから始め、次の世代へとつなげていくことが大事だと思いました。

「実現できる未来」

横浜商業高等学校 1 年 岩崎 大輝

「人間が想像できることは、必ず実現できる」

これは私が好きな言葉で、フランスの有名な小説家の名言です。私は、北方領土問題を解決するためには、平和的解決を行い、北方領土に住んでいる方々が仲良くなっている姿を想像することができないと、直接的な解決には繋がらないと考えています。

今回、視察団として、元島民の方のお話を聞き、実際の北方領土を間近に見て、実体験をしたことで、私は北方領土と日本を自由に行き来できる未来、ロシア人と日本人が協力し平和的解決をしている姿を鮮明に想像することができました。そして、北方領土問題は必ず解決できると強く思いました。

視察に参加する前、元島民の方は、故郷を離れることになり辛く悲しい思いをしていると思っていました。そのため元島民とロシア人の方は今でも仲が悪く、解決の糸口が全く見えていないという現状なのではないかと考えていました。

実際のお話でも、「樺太に強制送還されてしまった」という辛い思いや、80 年解決できていない状況になにか諦めを感じているような姿が見受けられ、解決は難しいと感じてしまいました。

しかし、お話を聞くにつれ、元島民が子供の頃、ロシア兵の方が遊んでくださったり、勉強を教えてくださったりと優しく接してくれたという思い出やビザなし交流会に積極的に参加するロシア人の方もいらっしゃるということをお聞きすることができました。この事から元島民の方もロシアに悪いイメージだけが残っているわけではないことや、ロシア人の中にも、日本に対して友好的な感情を持っている人がいることを知り、視察に参加する前にあった良くないイメージが払拭されました。この互いに対する良い印象があれば、過去の悪いところも良いところも認めあうことができ、未来の為に協力しあえるはずです。

私はこの視察団での経験を通して、日本とロシアの北方領土に対する元島民の方やロシア人の方の思いや考えを世界に発信していく必要があると考えます。そのために高校生の今だからできる語学の勉強をして、ロシアの方とスムーズにコミュニケーションをとれるようになりたい！それが、私の大きな目標となりました。これから、その目標とともに視察して学んだことである、「北方領土問題は元島民の方々だけの問題ではない」ということ、「正しい知識を学び、理解を深めること」、「元島民の方の貴重な証言」を未来へ伝えていきます。

北方領土の方々の真実や思いを発信していくことで、世界中の人々が北方領土問題を平和的に解決できる未来の姿を想像できることに繋がると考えます。そしてより多くの人に想像してもらうことによって北方領土問題の直接的な解決への第一歩になると確信しています。

「想いを受け継ぎ、未来へ繋ぐために」

神奈川県立横浜栄高等学校 2年 丸子 綾

私が北方領土問題に関心を持つようになったきっかけは、元島民の古林貞夫さんの言葉でした。

「せめてもう一回だけでも、兄弟の眠る島を訪れたい。」この切実な願いをテレビで耳にしたとき、教科書で習っただけの遠い話が、急に現実のものとして胸に迫ってきました。北方領土問題は、誰かの過去の出来事ではなく、今も続く“生きた問題”なのだと気づかされました。

その後、私は北方領土視察団の一員として現地を訪れる機会を得ました。実際に元島民の方や関係者の皆様から直接お話を伺う中で、私の中の“北方領土”という言葉の意味が大きく変わりました。教科書や資料で学んでいたこととは違い、現地の空気を感じ、声を聞くことで、ふるさとへの深い想いと長い歳月の重みを肌で感じました。

中でも印象に残っているのは、古林さんが語ってくださった「少しでも早く、せめて墓参だけでも、元気なうちに行かせてほしい。」という言葉です。その声には、ふるさとを想い続けてきた切実な願いと、長い間帰れなかったもどかしさが込められていました。以前、作文でこの言葉を引用したことがありましたが、今回直接その言葉を聞いたとき、同じ言葉でも伝わる重みがまったく違いました。表情や声の調子から、年月の深さや現実の厳しさがひしひしと伝わってきたのです。

また、古林さんが「ロシアの人々への恨みはない」と話してくださったことも、強く印象に残っています。むしろ、「食べ物を分けてくれた」「優しくしてもらった」と穏やかに語る姿が心に残りました。その言葉からは、長い年月の中で積み重ねられた“人としてのつながり”が感じられました。領土の線を引くのは国と国の問題ですが、島に生きた人々の心には、国境を越えた温かい記憶が確かに息づいている—そのことを古林さんの言葉から実感しました。

元島民の方々の高齢化が進む今、私たち若い世代がその想いを受け継ぎ、次の世代へとつないでいくことが何より大切です。「知ること」で終わらせず、「伝えること」へと繋げる—それが、これからの私たちにできる第一歩だと思います。今回の視察で学んだことや感じたことを、家族や友人など身近な人たちにも伝えていくことで、少しでも多くの人に北方領土について考えるきっかけをつくっていきたいです。



世界では今も争いや分断が続いています。だからこそ、北方領土をめぐる問題を単なる「領土争い」としてではなく、互いを理解し、共に生きる未来を考える課題としてとらえることが大切だと思います。

この視察で出会った人々の言葉と想いを胸に、私はこれからも北方領土の未来について考え続けていきたいと思っています。



「私たちの世代が守る記憶」

神奈川県立根岸高等学校 2年 片岡 基

今回、私は北方領土の隣接地域を実際に訪れ、北方領土問題に関わる方々から様々なことを学びました。教科書やニュースの中でしか知らなかった北方領土問題を、現地の空気に触れることで初めて実感できました。

現地では、資料館や展示などを通して、この問題の歴史的な経緯や複雑さを学ぶことができました。しかし、それ以上に印象に残ったのは、元島民の方のお話です。昔、国後島に住んでいた元島民の方が当時の生活の様子や島への思いを、まるで昨日のことのよう語ってくださいました。その言葉の一つひとつに、家族や地元を思う気持ちと、失われた日常の記憶が込められていました。

私たちが教科書で学ぶ「北方領土問題」は、国と国との領土交渉というイメージが強いですが、実際には、その背景にたくさんの人々の暮らしや感情が存在していることを知りました。また、単なる過去の出来事ではなく、今も続く問題であることも深く感じました。

一方で、こうした記憶や思いは、時間の経過とともに少しずつ語り継がれにくくなっていく現実もあります。実際に、現地の方の中には「若い世代に伝えていかなければならない」とおっしゃっていた方もいました。もしも、こうした声を私たちの世代が受け止めなければ、貴重な記憶や思いは、いずれ忘れられていってしまうかもしれません。

私はこの視察を通して、「伝えること」の大切さを強く感じました。北方領土問題を詳しく知る人や、実際に経験した人たちの声を、次の世代へとつなげていくこと。それは、単に知識を広めるという意味ではなく、「記憶を守る」という行為でもあります。そして、この問題を「誰かの問題」ではなく「自分たちの問題」として考えることが、解決へと近づく第一歩になると感じました。

この問題は、私たち若い世代がすぐに答えを出せるものではありません。しかし、関心を持ち続けること、そして周りの人たちにも関心を広げていくことは、確実にできることです。たとえ小さな行動でも、次の世代へとつながるきっかけになると信じています。

視察を終えて改めて感じたことは、北方領土問題は「歴史の一部」ではなく、「今も続く現実」だということです。だからこそ、私たちの世代がこの記憶を受け取り、忘れず、そして伝えていくことが大切だと思います。

今回の視察を通して、私自身もその記憶の担い手として、関心を持ち続け、語り継ぐ存在になりたいと強く思いました。

「少しでも早く」

神奈川県立新羽高等学校 3年 渡辺 莉光

今回の現地視察に参加し、北方四島の返還はみんなの想いであることをより身近に感じる経験をすることができました。それは交流センターや北方館の見学からもそうですが、一番は町のあちこちに見られた「返せ！北方領土」「北方領土は日本の領土」と書かれた看板の存在でした。私達の住む神奈川では、日常的に見られないものです。根室に住む人々は、小さなころから馴染みのある場所に北方領土問題を意識できる存在があり、行動まで起こさなくとも、大人になるまでに何度もそれを見て「ああ、まだ返ってこないんだな」なんて思うのかと考えたのです。それはとても悲しいことだと思います。人が生まれて大人になって、歳をとれるほどの間無くすことのできない看板が、みんなの返還への想いの象徴であると強く認識しました。間近で見られて本当に良かったです。

また、私達は一日目に元島民の古林さんのお話を聞かせていただきました。以前私は作文で、私自身が侵攻の経験者ではないから、当人のように気持ちを理解することは難しいという前提のもとに北方領土返還に向けての意見を述べました。しかし古林さんのお話は、表面的な知識としての経験者の姿ではなく、ロシア兵が来た時の島民の方々の扱いや帰れなくなってからの時間の長さの実感を細かく想像させるもので、完全にとは言えずとも、自分なりに島民の方々がどんな気持ちだったのかを考え共感することができました。特に強制送還されてからのお話は人権を訴えたくないととても心苦しい内容でしたが、そんなことを思い出し語っていただいた後でも、古林さんはロシアの人を恨んでいるわけではないと仰っていました。やってきたロシア兵に優しくしてもらったというお話もしてくださいました。それだけでなく、交流センターの見学でもビザなし交流時の話を聞き、文化交流の楽しそうな様子の写真を見たのです。それらを通して、領土返還を求める上で必要なのは、一方的ではなくお互いの気持ちを尊重することなのだと改めて思いました。

豊かな水産資源や自然の動植物を有する北方四島は、きっと今住むロシアの人々と日本の元島民の人々両方の大切な故郷です。返還が叶い共存の道が開ければ、2つの国の人々が密接に関わり合える唯一無二の場所になることができるかもしれません。しかしその前に、元島民の方々はどんどん高齢化してしまっているのも現実です。島での思い出を持ち故郷とする人が日本にいなくなってしまう前に私達は解決を目指さなければならないと思います。

そのためには、沢山の貴重なお話を聞くことができた私達が、身近な人へ、また次の世代へと伝えていき、国全体の意識を高めることが必要であると強く感じました。そして返還が叶い、まずは元島民の方が自由にお墓参りに行けるようになってくれることを切に願います。

引率者の感想

「リアルな体験こそ最大の学習」

神奈川県立横浜栄高等学校 澤野 理

昨年に続き2回目の同行（引率）を終え、私は表題にも記した「リアルな体験」が現地視察に参加した中高生に大きな成長の機会を与えたことを改めて感じた。

神奈川の現地視察は、作文コンクールの入賞者を現地視察に派遣する。聞くところによれば、他の都道府県では、先に現地視察に派遣し、その後に作文を課す形式が多いという。このサイクルは、現地の経験を踏まえて強い思いの作文を書くと言う点では、効果のある方法であると考えられる。一方、本県では、作文 → 現地視察 → 県民大会での発表（中学生の場合はさらに全国スピーチコンテスト）、すなわち、調べる → 考える → 表現する → 現地でリアルな体験をする → 問題意識をいっそう深める、というサイクルとなっている。今回の現地視察でも、その成果を十分感じることができた。参加した生徒は、作文コンクールの入賞者なので、現地へ赴く前からそれなりに高い問題意識を持っていたことは言うまでもない。しかし、現地で元島民の方の話をうかがい、北方領土たる島々を間近に見たことで、それまで頭の中だけで考えていてことが、リアルな現実として生徒たちに衝撃を与えた。特に、納沙布岬や羅臼の展望台から見た島影から、領土問題の切実さを感じたのではないだろうか。こうした体験を承けて、10月31日の県民大会では各々の熱い想いを語っていた。今後は、日頃の教育活動を通じて、県民大会での訴えを若い世代に広くつなげられる手だてを、自分なりに追求したいと思った。

現地視察は、また、神奈川と全く異なる北海道東部の様子を知るという点でも得がたい機会となったのではないだろうか。広大な大地、おそらく、人よりも多い数の牛や馬、厳しい自然の中で暮らす人々の知恵。これらを踏まえて、返還後の北方領土をどのように充実した世界にしていくのかということに、生徒たちが目を向けてくれることを期待したい。

「北方領土青少年等現地視察事業に参加して」

川崎市立生田中学校 大坂 誠

今回、北方領土青少年等現地視察事業に引率者として参加して、気がついた点が2つある。

一つ目は、第二次世界大戦終戦から80年が経過し、戦争体験・経験の継承の必要性が指摘されているが、旧島民の四島に対する思いや彼らの戦後直後の体験・経験、すなわち旧ソ連軍の侵略やその後しばらく続いた旧ソ連人と生活をともにしたこと等についても、同様の必要性があることである。旧島民の高齢化が進む一方、北方領土問題解決に向けた外交交渉は決して円滑に進んでいるとは言えない状況にある。戦後80年という時間は、四島側でも世代交代を進め、他のロシア地域と同じような生活が営めるよう、インフラ整備等をはじめとしたいいわゆる「ロシア化」が進んでいる。現在、四島に住む大多数の住民は、第二次世界大戦の結果、旧ソ連、すなわちロシアが獲得したものであり、先の大戦の結果については変更すべきではないとするロシア政府の見解が浸透している。日本国内では旧島民の思いや体験・経験の継承が指摘される一方、現在の四島側にはそのような必要性はなく、着実に「ロシア化」を進めている。この差異は、実効支配ができているかどうかの違いに起因するところが大きいですが、それだけでなく、四島についての国内世論の認識の違いも大きいと言えよう。日本国民・市民の四島についての認識は、四島の地理的關係を含めて、決して高いとは言えず、また旧島民が思い描く四島返還に向けた世論形成も十分とは言えない。一般的に、社会状況の変化に対する対応は、その時々現状認識にもとづいておこなわれることが多いが、一方で現状認識にもとづいてはならないこともある。現在の我が国における近隣国への外交問題に対する世論のあり様を鑑みるに、第二次世界大戦における我が国が体験・経験を基底に据えた世論形成のあり方の重要性を強く感じる。過去の体験・経験を基底に据えた世論のあり方や政策の実行のためにも、戦争体験、あるいは旧島民の体験・経験の伝承は急務と言えるのではないか。

二つ目は、ロシアとウクライナの戦争状況が、四島返還を求める動きに大きな影響を与えていることである。ロシアのウクライナ侵攻は看過できない事態であるが、日本政府がロシアに対立する形で非難する立場を取ったことにより、旧島民の墓参をはじめとする四島交流事業の再開が見込めない状況となっている。領土問題等のような国の主権が関わる問題の解決には、国際情勢の安定が不可欠であることを改めて実感すると同時に、国際紛争における日本政府の立場のあり方についても、紛争当事国を一方的に非難するのではなく、それまで積み上げてきた信頼関係をもとづかなければならない必要性を強く感じる。四島交流事業の再開見込みが立たない状況は、一方的な非難による結果として重く受け止める必要があろう。また、国際紛争解決に対する日本政府の立場のあり方を模索するためにも一つ目に指摘した点は必要と言えよう。

今回の視察事業で感じ取ったことをもとに、今後も学校教育現場において、日々の実践に取り組んでいきたい。

「夢から現実へ」

川崎市教育委員会事務局生涯学習部地域教育推進課 中里 晋一

ようやく秋らしくなってきた神奈川・東京から、早くも冬支度を始めている北海道の空港に降り立ったのが10月中旬であった。空港の玄関を出たところで既に冷たい風に載せて、牧草や飼料の匂いが町中を覆っている気がした。

昨年に続き、2年連続での参加をさせていただくこととなった。ロシアとウクライナの間では、国際法上どの言葉で表現するかという問題はさておき、両国軍の戦闘状態は相変わらず続いており、3年半を過ぎてもいまだ終わりが見えていない。戦争、軍事作戦、不法占拠、北方領土、領土問題なし…。政治は国や政府の都合で様々な言葉を紡ぐ。同じ事実をとらえているはずなのに、立場が違ふと違ふ言葉で表現しようとする。戦後80年、この「北方領土」もそこに暮らしてきた人々の思いを飛び越えて、主の帰りをずっと待っていたのだろう。コロナ禍以後途絶えてしまった元島民の墓参や、現島民との交流事業の再開を目指し、さらにその先に北方領土返還を夢見る、四島出身の方々が今も力強く暮らしている。夢に見る北方領土返還は、懐かしい故郷との再会であり、失った80年の時間を取り戻す魔法だ。

だが、現実はどうだろう。80年間、インフラの整備はままならず、目立った産業が興ったわけではない。北方四島では確かに人々が住んでいるが、どんな暮らしをしているか厚いベールに包まれてその実態は分からないことだらけだ。ところが、私たちが待ち望む夢の「北方領土返還」の先には間違いなくその“現実”が待っているはずである。世界三大漁場と呼ばれるこの地域では、漁業が盛んであった。これに加え、択捉の林業や鉱業、国後での畜産業など現在はどうなっているのか。

今回、隣接地域に行き、肌で感じた様々な感覚を大切に、北方領土の有効活用策を提案できないだろうか。返還された北方領土を、日本人である私たちならこうして再開発をして、現在のロシア占領下の状態よりもこんなに豊かな生活になるのだと、青写真を描いて語ってほしい。様々な資料や史料からそれぞれの島に合った振興策を練り上げ、人種や国籍を超えてそこに暮らす人々が豊かに暮らせる島に再生するには、その魅力に国内外から注目される島にするために、このような会に参加した若い中高生の皆の柔軟な発想と、ここで得た知識や体感がまさに大きな力になっていくのだと思う。素晴らしい大自然の残る四島に、日本の人々が笑顔で降り立つ日はいつ来るのだろうか。



「北方領土問題を自分事として捉える」

神奈川県教育委員会教育局支援部子ども教育支援課 酒井 亮子

今回、「北方領土青少年等現地視察」に同行し、初めて身近に北方領土問題を感じるようになった。私にとって北方領土問題は国家間の難しい問題であるという認識であったが、実際に元島民の方などのお話を聞き、同じ日本人が苦しんでいる身近な問題であるということを実感した。

元島民の方のお話では、ソ連（ロシア）兵が来たときには恐ろしかったが、強制送還が開始されるまでは、ソ連兵に頭をなでてもらったり、お菓子をもらったり優しくしてもらったとのことだった。また、強制送還時には、一時樺太に収容される苦い経験をされたことや、その数年後に、ようやく先祖の墓参りの機会がめぐってきたが、実際には、本当の墓には行けず、別の場所でお参りせざるを得なかったことをお聞きした。特に、先祖を敬うその思いが、戦争により長きにわたって断たれ、満足に墓参りさえできなかったことに衝撃を受けた。もし自分が故郷に帰ることができず、同じ立場になっていたらどうか…この時初めて、北方領土問題を自分事として受け止めた。

また、視察の各所で元島民の方にお会いできた。金刀比羅神社、羅臼に向かう途中の道の駅、羅臼国後展望台。神奈川から視察に来たことを伝え、どなたも嬉しそうであった。そして、「北方領土問題について教科書に記載されている量は減っている。もっと知ってほしい。」という切実な声も聞くことができた。

北方領土問題は国家間の問題だけではない。個人の人権が侵害されている問題などもある。例えば、今もなお、同じ日本で生きている多くの方が生まれた住まいに戻れないなどである。しかし、元島民の方は、複雑な思いを抱えながらも、お互いが自由に行き来できる関係を望んでいた。私たちは、その思いを知る必要があると感じた。

今回視察に参加した生徒たちは、3日間真剣に北方領土問題に向き合っていた。生徒たちの真摯な姿勢に、説明する方も熱が入っていた。夜の勉強会では、生徒それぞれが北海道に来たからこそ実際に肉眼で見ることでできた北方領土や自然・動植物について意見を述べていた。「返還運動」の大切さを感じるだけでなく、「ロシアとの共生」「北方領土の共有」について述べる場面もあり、その考えの柔軟性や視野の広さにハッとさせられた。この視察は、参加した生徒たちにとって、ロシアの人々とのよりよい関係性を模索するきっかけとなったのではないだろうか。

今後大切なことは、今回感じたことを自分だけのものにせず、以前の自分のような北方領土問題が自分から遠い問題と感じている人たちに伝えることであると考え。そして、私は教育に携わる者として、北方領土問題への正しい理解ができる授業づくりに取り組んでいきたい。

「新たな出会から共に学び続ける」

北方領土返還要求運動神奈川県民会議事務局長 前島 藍

今年も中高生の作文コンクールの入賞者とともに、本視察に参加し新たな気づきや学びがありました。また、戦後・被爆80年という節目において、これまで以上に平和について考えるタイミングでもありました。

複数回訪れている場所であっても、見える景色が違ったり、世界情勢によって感じる視点に変化があったりと、新たな気持ちで視察をすることができました。丁寧な説明と共に施設内を案内していただいたり、時間を惜しまず北方四島についてお話してくださったり、何よりも人との繋がりを感じる視察でもありました。そして今回も、視察施設以外の場所でも神奈川からの視察団ということを伝え、温かく迎え入れていただき、声をかけていただきました。このような出会いがあるからこそ、現地を訪れる大切さを感じます。

また、視察の行程についても、よりよい視察となるよう検討を重ねました。天候が悪く、洋上視察はできませんでしたが、新たな人との出会いがあり、そして新たな場所を訪ねることと新鮮な気持ちで北方領土問題を学ぶことができました。元島民の方の思い、2世・3世の方の思い、北方領土隣接地域で暮らす方たち、外交問題など、それぞれの視点があり考え方があって、今の自分にできること、若い世代にできることを考える時間となりました。

今回の視察で初めて出会った生徒たちは、緊張しながらのスタートでしたが、少しずつ交流を深め、神奈川の代表としての視察の行程を進めました。2泊3日という短い時間ではありましたが、北方領土隣接地域という場所に立つことで、目で見える距離にある国後島や貝殻島を自分で確認することができました。これまでは、資料の中にある北方領土問題として捉えていた生徒たちでしたが、現地を訪れたことで、目の前にある現実的な問題であること、自分事として捉えなければいけない問題であることと意識が変化していました。学校の授業で学んだことや自ら調べたことから、自分の考えを作文に書いた生徒たちは、現地で見た景色、元島民の思い、歴史的背景、肌で感じたことなどから、さらにその先に目を向けている様子でした。

そんな生徒たちの姿を見ながら、私たち大人にできることは何なのか、さらに考えていかななくてはいけないのではないかと思います。若い世代の力は偉大です。若い世代だからできること、彼らだからこそ考えられることがあるはずです。その力を最大限に発揮させるために、私たちも力を注がなくてはならないと改めて考えさせられました。この視察だけで終わらせることなく、次のステップに進むために、視察に参加した生徒たちと共に、県民会議としてできる返還要求運動の推進をしていきたいと思っています。これからも若い世代と共に学び続け、四島返還に向けて、更なる一歩を踏み出したいと感じる視察となりました。

神奈川新聞 2025年11月02日付 地区B

現地で元島民らの話を聞いた思いを話す中高生ら
＝10月31日、横浜情報文化センター



元島民の願い伝える

また、県民会議の事業として10月に根室市などを訪れ、元島民らの話を聞いた県内の中高生14人も思いを届けた。横浜市立富岡東中1年の甲斐正太郎さんは「元島民の平均年齢は89歳。限られた時間の中で、自分たちが何ができるのかを考えることが僕たちの責任」と話し、同市立浦島丘中3年の中浜唯紗さんは「島に帰ることを願い続ける人たちの思いを無駄にしないように学び、伝え、平和を守るためにできることを探していきたい」と決意していた。

人を追い出した。元島民の高齢化が課題となる中、県民会議会長の長田進治県議会議長は「一人一人が正しい認識を持ち、返還の機運を高めていくことが大切」とあいさつした。

大会では、20年後、北方領土を平和のモデル地域にするには「をテーマとした北海道根室市と関東甲信越の中学生による意見交換会に参加した横須賀市立久里浜中学校の4人がビデオで成果を発表。「日本人とロシア人が相互理解を深め共存する」といった意見が多数上がったことなどを発表した。

横浜で 県民大会 中高生が現地視察報告

ロシアが実効支配を続ける北方領土の早期返還を求める県民大会が10月31日夜、横浜市内で開かれた。若い世代に北方領土への思いを引き継ぐ必要を示しながら、「県民の総意を結集し、一日も早い返還を実現するため、さらに粘り強く運動を推進する」とした大会宣言を採択した。

(矢沢 拓郎)

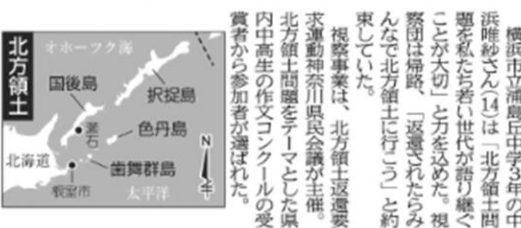
北方領土早期返還を

©神奈川新聞社 無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

戻らぬ島々 思いはせ

県内中高生14人 北方領土視察

北方領土問題の若い世代への理解を深めようと、北方領土青少年等現地視察事業が10月11～13日、行われた。県内の中高生14人が、返還運動の原点の地である北海道根室市などを訪れ、いまだ戻らぬ島々に思いをはせた。(天澤 拓郎)



北方領土(択捉島、国後島、色丹島、歯舞群島)は1945年、当時のソ連軍が占領し、生息を営む日本人を追い出した。元島民の平均年齢が89歳になり、返還運動の若い世代への継承が求められている。

墓参りせめてもう一度 元国後島民 古林さん

「ここが自分の故郷だ」。2012年、元国後島民の古林貞夫さん(87)は生まれ育った山々を船から65年ぶりに望み、思わず涙を流した。その脳裏には、かつての島の暮らしがよみがえってきた。

さかのぼって1938年、国後島の瀬石地区で古林さんは生まれた。一家は尾布や貝を捕るなど漁業で生計を立てていた。瀬石地区は島の中でも自然に恵

まれの山や浜の至る所で温泉や水蒸気が湧き出て、野菜をながして食べていた。派手な娯楽はなかったが、子どもたちは海や山が格好の遊び場だった。戦時中でも比較的穏やかな生活が続いていたという。

しかし、45年の終戦から一週間の島民とソ連兵との生活が始まった。ソ連兵は子どもには優しく、お菓子をもらったり、一緒に遊んだりした。片言のロシア語も話せるようになったという。

47年7月、島民の強制移住が始まり、11月に古林さんは樺太の政庁に送られた。その後、北海道の函館に降り立ち、根室へ移った。今では返還運動に精力的に取り組む。

2012年には、日本とロシアの交流事業で故郷の土を踏んだ。場所を移しながら先祖の墓参りは実現した。だが、瀬石はロシアの軍事施設になっているため、今なお入ることはできない。その後も3回ほど帰郷したが、19年を最後にコロナ禍とロシアのウクライナ侵攻で帰ることができない。

返還が果たされぬ現状と元島民の高齢化による返還運動の先細りに危機感を覚える。「元気がなくなつてしまつてもう一度、島で墓参りがしたい」と願っている。

平和人がつくる パラヒンさん

「平和は国が与えるものではなく、人がつくるもの」。県立二保川高校1年のパラヒン・ノア・リアーナさん(16)が視察前、北方領土について考えた時に、ふと思いついたロシア人の祖父の言葉だ。

視察では、北方領土に住むロシア人の生活に日本が寄り添っていたことを知った。以前は日本製の商品を使ったり、日本人との交流も盛んだったという。

「島に住むロシア人は日本に敵対心はないと思う」。ロシア

にルーツを持つことで、中立の立場から問題を考えることができた。解決には「政治に左右されず、人同士の交流を続けることが重要」とも確信した。

だからこそ、ウクライナ侵攻で交流事業が中断した現状を憂う。そして、問題解決の先にある島の未来を夢見る。「島に横たうネルを通して両国をつなぐ複雑な事情が絡むことは理解しつつも、視察を経ての気持ちをみんなに伝え続ける。それが今の私にできること」。より一層、祖父の言葉が胸に落ちた。

も帰ることができていない悔しさが伝わってきた。「一方でロシアの人々への恨みはないと種やかに話していたことは意外で、故郷を追われるつらい思いをロシア人であっても二度と自分なりに受け止める。

「古林さんから感じたことを積極的に話し、北方領土について考えるきっかけをつくってきたい」

感想文

視察に参加した14人は、現地で見たこと、感じたこと、考えたことを感想文にまとめた。

横濱市立富岡東中学校1年・甲斐正太郎さん(13) 根室市で目に入つたのは「返せ! 北方領土」という看板だった。地域全体が北方領土問題の解決を強く願っていると感じた。この問題をどうにか解決する。自分ができることから始めていく。

同市立立花中学校3年・藤井彩香さん(15) 北海道から見た北方領土は、ハイブリッドがなければ渡れそうに近かった。国

同士で責め合っても解決には向かない。それぞれ考え方や生活があることを忘れてはいけないと思った。

県立岸根高校2年・片岡基さん(17) 元島民たちの思いと島の記憶を「伝えること」の大切さを強く感じた。これは「記憶を継ぐこと」にもつながる。問題を歴史の一部ではなく今も続く現実と捉え、その記憶を忘れず、次の世代へ伝えることが大切だと思う。

県立新羽高校3年・渡辺新光さん(17) 北方領土は島に住むロシア人と日本人の元島民の故郷。返還と共存がかなえば両国が密接に関われる唯一無二の場所になるかもしれない。そのためには国全体の意識を高めることが必要だと感じた。

令和7年度「北方領土に関する作文コンクール」募集ポスター

地図帳に描かれている北方領土

10年後の北方領土は、どうなっていますか？
北方領土に関する問題の解決方法、返還後のビジョンなどについて、考えたこと、学習したこと、友達や家族と話し合ったこと、身近で体験したことなど自由な内容でけっこうです。

北方領土に関する中高生の作文を募集中！
今年度、コンクール入賞者には賞状と図書券を進呈するとともに、北方領土現地視察(10/11～13)への派遣候補者となります。※事前説明会・事後報告会(県民大会)への参加が条件です。

応募締切 2025年9月3日必着

北方領土返還要求運動神奈川県民会議 **検索**

事務局：神奈川県北方領土問題教育者会議
〒231-0023 横浜市中区山下町24-1 4F

主催：北方領土返還要求運動神奈川県民会議・神奈川県北方領土問題教育者会議
後援：神奈川県・神奈川県教育委員会・独立行政法人北方領土問題対策協会



「知る事」が
四島返還の 第一歩

北方領土は
日本固有の領土です!

羅臼町から望む国後島の朝日

羅臼町から国後島まで最短距離
わずか 25km

世界自然遺産のまち 羅臼町